

1996年(平成8年)7月13日(土)

スナネル療天

125

やすらぎの ケケア

薬物依存症 3

「寂しくてシンナーや覚せい剤に手を出した。でも、見えない所で母がいろいろと気を配ってくれていたことに気づいた。私がわがままだった。遊ぶだけの生活には、もう戻らない。病気の母には、今まで迷惑をかけた分、夕食を作ったりしてあげたい」

札幌市内にある札幌太田病院(二百六十五床)に入院していた女子高生は、抑え切れなくなった感情を切々と作文用紙につづった。入院時「頼んで産んでもらったわけではない」などと言いつつ、張っていた彼女を変えていた。

内観で自分振り返り 誤った物の見方修正

たのは、一週間の「内観療法」だった。内観は、奈良県に住んでいた吉本伊信さん(故人)が約五十年前、浄土真宗の一派に伝わる「身調べ」という修行

「して返した」と「迷惑をかけた」という三問を、幼少期から克明に振り返る。現在の誤った思考や行動が生じてしまった原因などを、自ら洞察する。

一週間もって実施

現在、内観は少年院や刑務所での矯正教育、一般社会人の自己啓発、精神科の治療に用いられている。同病院では約二十年前、まずアルコール

「一時間ごとのテーマは、まず「母」についての三問から始め、患者の幼少期から青年期、成人後へと時期を区切って、順番に思い出す。それが終わると、次に「父」、そして「配偶者や「友人」へと、テーマを移していく。

しかし、「重大な葛藤の潜在部分に差しかかると、患者はしばしば、その問題に直面するのを避け、浅い回想で済ませようとします」

と、指導員の大関孝弘さん。そんな時は、次のテーマへ進まずにやり直しを命じ、洞察を深めさせる。

「こうした作業を通じて「自分が『して返した』こと」の多さと『して返した』こと」の少なさに気づき、『多くの恩や愛に恵まれていたのだ』と安心できる」と、太田耕平院長は説明する。

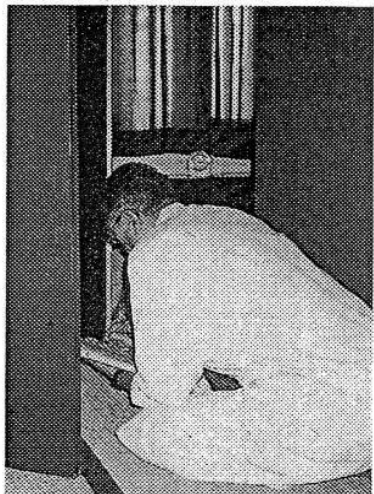
信頼関係取り戻す

依存症の治療プログラムを導入。その後、薬物依存症や拒食・過食症、登校拒否、家庭内暴力など様々な症状へ対象を広げてきた。院内の内観療法室は、定員三人。和室の三隅が約半畳ずつ、びょうぶで仕切られており、患者たちはその狭い区画に一週間もって、朝六時半から夜七時半まで内観に取り組み。指導員が一時間ごとに訪れて、回想した結果を聞き取ってから、次の一時間に思いつくべきテーマを指示する。

「薬物依存者は『自分は愛情を受けてこなかった』などと、心に壁を作ったり、恨みを抱いたりしていることが多い。薬物に依存し始める以前に問題があって、他の人との信頼関係を築けず、自信もなくなっている。その経緯を、患者自ら納得することで、誤っていた物の見方を修正できる」と太田院長。

そして、患者の変化を、指導員や家族が受け止めてあげることが、新たな信頼関係につながる。内観終了時には感想文を書き、家族に読ませるが、覚せい剤依存症で入院中の男性患者三丸は「生まれて以来、迷惑かけたことを読み上げて謝ったら、こんな犯罪行為は絶対許してくれないと思ってた母が『もう二度としないでね』と、許してくれた。今は、何でも人に打ち明けることができるようになりました」と、涙をにじませた。

太田院長は「非常に有効な治療法」と語るが、病院にとっては人手を要する治療法でもある。効果を上げるには、担当看護婦や指導員が全員、自ら内観を体験し、熟知しておく必要がある。原則として一週間交代せず、連日早朝から夕方まで患者を見守る。「内観を評価する保険点数がないので、請求しても削られがち。医薬品なら簡単に点数がつくの……」。太田院長は、薬漬けが優遇される医療制度に、苦しい思いを抱いている。



1時間に一度、びょうぶを開き、回想結果を聞いて記録する大関指導員(札幌太田病院で)